

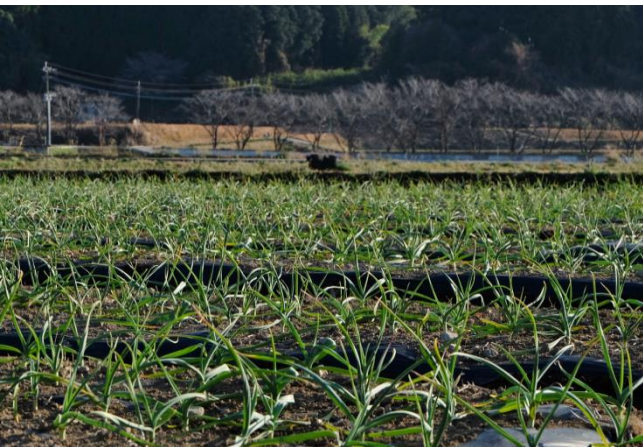
旭志伊萩地区（菊池市）

人々が生き生きと心豊かに
安心して暮らせる地域づくり
（作業効率化・品質向上・6次産業化）

キーワード

法人経営

露地野菜



ビジョン策定年度：令和元年度 目標年度：令和5年度

1. 課題と将来像・ビジョンの内容

地区の「課題」と「将来像」

【地区の課題】

- ・担い手が高齢化し、後継者が少ない
- ・個人所有の農業機械が多く、老朽化を機に離農の懸念がある
- ・高収益作物の栽培が少なく、土地の収益性が低い
- ・管理困難あるいは作付に不向きな農地が一部あり、耕作放棄の懸念がある



【地区の目指す姿】 = **ビジョン**

- (1) 担い手の確保とコスト低減
- (2) 農業従事者の所得向上
- (3) 基盤整備による作業性の向上



【成果目標】

- ・法人の経営面積を40haまで拡大する。
- ・にんにく等の野菜を2ha栽培し、加工品の開発にも取り組む。
- ・畔の除去等により1haの簡易な基盤整備に取り組む。

ビジョンの内容

(1) 担い手の確保とコスト低減

- ①「農事組合法人杉井川」を核として農地集積を進め、機械の集約・農地の効率的利用によるコスト低減。
- ②労働環境を整備し、後継者の定着や雇用労力の確保を図る。
- ③定年帰農者の法人構成員への参加を推進。

(2) 農業従事者の所得向上

- ①新規品目として、にんにく等の野菜の栽培及び加工に取り組む。
- ②法人の経営安定と構成員の所得向上を図る。

(3) 基盤整備による作業性の向上

- ①作業機械を導入し、自力で簡易な基盤整備（用水路の拡幅や畔の除去）による区画拡大。
- ②老朽化したパイプラインの更新に取り組む。

整備・導入内容

令和2年度	バックホー、農業倉庫整備
令和3年度	消毒用ドローン、グレンタンク、穀物コンテナ

2. 旭志伊萩地区の現状

【農業者に関する状況】

・総戸数	117戸
・総人口	309人
・農家戸数	34戸
・農業者数	50人
・担い手数	14人
・65歳以上の就農者数	5人

【農地に関する状況】

- (1) 面積区分
 - ・水田 83ha (うち法人30ha)
 - ・畑 (樹園地除く) 46ha (うち法人0.2 ha)
- (2) 筆数
 - ・水田 501筆 (うち法人207筆)
 - ・畑 (樹園地除く) 330筆 (うち法人3筆)
- (3) 作付区分
 - ・水田 水稻・WCS・麦・飼料作物
 - ・畑 (樹園地除く) 飼料作物
- (4) 耕作放棄地 あり

【基盤整備に関する状況】

- (1) 耕作道路 幅員が2.0m以上・舗装済
- (2) 排水 コンクリート水路
- (3) 用水 水路から直接取水

■地区の現状

- ・菊池市南側の中山間地に位置し、基幹産業である畜産が盛ん。
- ・農業従事者のうち65歳以上は約35%で、**後継者のいる世帯は4戸**。
- ・管理作業が困難だったり作物栽培に適さない水田が一部に存在。
- ・多くの農家の農業機械が老朽化。買い替えず**離農の懸念がある**。
- ・令和2年2月、担い手農家10戸14人で「**農事組合法人杉井川**」を**設立**。



農地集積加速化事業 平成30年度指定地区



©Google Map

3. ビジョン策定のプロセス

法人経営

露地野菜

(1) ビジョン策定に至ったきっかけ

法人経営で安定した営農体制をつくり、農業を続けたい

代々継承してきた水田を守るため平成18年に設立した伊萩営農組合を前身とし、令和元年、主に水田農業を営む農家で法人化に向けて「伊萩営農改善組合」を立ち上げた。**令和2年に「農事組合法人杉井川」を設立**。設立準備の中で設備整備を模索していたところ、行政職員から本事業の案内があり、ビジョン策定に至った。



令和2年2月に設立した
「農事組合法人杉井川」

(2) ビジョン策定メンバーと手法

【メンバー】

「農事組合法人杉井川」のメンバーで、水稻、飼料作物、飼料用米、繁殖牛等を手がける農家10戸14人。

【手法】

同じメンバーを含む組合や地域活動がベースにあり、ビジョン検討当初から地区の課題や将来像が明確だった。そのため、スムーズな話し合いによって決定した。

(3) ビジョン策定の流れ

農業継承のために 必要なこと

農業従事者の高齢化や機械の老朽化による離農懸念から、以前より法人経営や共同で使用する機械の導入によって農家個人の負担を軽減し、コスト低減と労働力確保を図りたいと考えていた。

理想の営農体制

法人経営による米の生産や販売、収益向上につながる新規品目の導入を主軸に本事業を進めたい。

具体策の検討

事業を活用することで実現可能な具体的方策（機械導入等）を計画し、伊萩地区で農業を継承し、持続を図るといった目的意識を再確認。

合意形成

営農改善組合時の先進地研修や長年リーダーシップの取れた活動が功を奏し、大きな問題なくスムーズに合意を得ることができた。

■ビジョン検討の流れ

回	実施日	話し合いの具体的内容	参加人数
1	令和1.11.25	・地区農業ビジョンの説明 ・ビジョン作成の意義と集落の現状について	11人
2	令和1.12.4	・地区農業ビジョンおよび事業内容の検討 ⇒スケジュールの確認・役割分担	12人
3	令和1.12.11	・地区農業ビジョンおよび事業内容の検討 ⇒営農法人の形態と経営計画・試算	11人
4	令和1.12.19	・地区農業ビジョンおよび事業内容の検討 ⇒営農法人の形態と農地賃借料について	9人
5	令和1.12.25	・地区農業ビジョンおよび事業内容の検討 ⇒法人の定款・規約、税理士・司法書士の選定、 設立総会について	9人
6	令和2.1.14	・地区農業ビジョンの集落住民への説明 ⇒法人設立、農地賃貸料等の説明	25人
7	令和2.2.12	・機械・施設などの導入計画の検討 ・ビジョン決定	10人

※「農事組合法人杉井川」の設立準備が進む中でのビジョン検討だったため、検討会議では法人設立についての話し合いも含まれる。

(4) 重点ポイント①

法人経営による営農体制の理想

ビジョン検討以前から伊萩営農改善組合のメンバーで各地への先進地視察研修を実施してきた。

その中でも、平成31年4月に視察した熊本県山鹿市の「農事組合法人 庄の夢」は法人で米を生産・販売していることから、伊萩の理想に近かった。この視察で「こだわりを持って米を販売したい」と改めて実感。「**法人でおいしい米や新規品目を生産・販売したい**」という思いがビジョン検討時のベースとなった。



視察研修の様子

(5) 重点ポイント②

農家の負担軽減と作業の効率化

農業従事者の高齢化、農業機械の老朽化による離農を避けるには、**共同で使う農業機械・施設の導入が必須**と考えていた。

法人での機械・施設導入及び管理によって、省力化・効率化を計画的に進めていくことにした。

ビジョン（1）担い手の確保とコスト低減

- ①農事組合法人杉井川を核として農地集積を進め、
機械の集約・農地の効率的利用によるコスト低減。

法人の経営面積は30haまで拡大

法人経営により、主食用米17ha・飼料用米6ha・WCS（飼料稲）7ha、裏作で麦11ha・飼料作物0.3haを作付け。目標の40haまで引き続き拡大を行う。

生産した米は、地権者及びレストラン1軒への販売を開始。販売はまだ少ないが、令和4年度から、おいしい米づくりを目標に「ヒノヒカリ」から「くまさんの輝き」に全面転換を実施する。

穀物コンテナやグレンタンク、バックホー等、米の生産や農地集積に必要な機械・施設を導入したことで、作業の効率化と各農家の負担軽減が図られた。 今後は、人員にムダが出ないようにオペレーターや作業者の配置を工夫し、もっと効率化・コスト低減していきたい。

オペレーターを育成し、消毒用ドローンを活用

令和3年度には消毒用ドローンを導入。導入時期が遅れたため、まずは麦の除草剤散布で利用した。令和4年度は、麦の赤カビ防除、水田防除に利用する予定。オペレーターは、若手の担い手2名が別事業で技能を修得しており、作業受託の場合は単価を決めて対応する。

※米関連では、本事業と別に「くまもと土地利用型農業競争力強化支援事業」により令和2年度に田植機（8条）1台とトラクター（72ps）1台、令和3年度に自脱型コンバイン（6条）1台と乾燥機（40石）3台を導入。行政と連携しながら様々な事業を活用し、伊萩の目指す営農体制づくりに取り組んでいる。



ドローンによる除草剤散布

ビジョン（1）担い手の確保とコスト低減

- ②雇用環境を整備し、
後継者の定着や雇用労力の確保を図る。

所得向上のカギとなる事業を進める

本事業によって農業用機械・施設等の整備が進んだことで、新規就農者を受け入れる体制を整えることができた。

現在新規就農者を1名確保、今後3名の後継者が就農予定となっている。

米の生産・販売、にんにくの栽培を軌道に乗せ、全体の所得向上を目指す事が、結果的に伊萩で暮らす人を増やし、後継者や新規就農者の定着につながると考えている。

- ③定年帰農者の法人構成員への参加を推進。

実現までには至っていないが、今後も取り組みたい。



集積等について検討する様子。今後も、法人による農地集積や作業受託を進める



（右）「農事組合法人杉井川」の名前の由来になった「杉井川水源」。悪疫から人々を守ったと伝わる清冽な湧水

（下）大塚富次代表理事



ビジョン（2）新規品目導入による所得向上

①新規品目として、 にんにく等の野菜の栽培及び加工に取り組む。

令和4年度、法人によるにんにく栽培を開始

にんにく栽培については、個人での栽培はあるが、法人として取り組みを開始。令和4年度から「嘉定種」を50a試験作付けし、令和5年度より本格栽培を予定している。今後必要な乾燥機や掘り取り機を導入計画しており、2haの作付けが目標。

にんにくは、ここ数年高単価で取り引きされ、健康食品としても価値が高い。本格栽培後、当面は青果のみの取り扱いを考えているが、加工品（黒にんにく）の生産販売や受託も視野に入れて事業を進めていく。

②法人の経営安定と構成員の所得向上を図る。

具体的な成果が上がるまでには至っていない。米の生産・販売、にんにくの栽培、作業受託等を軌道に乗せて、経営の安定を図りたい。



現在個人で栽培しているにんにく。法人による栽培は、令和4年秋に植え付け、令和5年5月下旬頃収穫予定



「くまさんの輝き」の実証圃場

ビジョン（3）基盤整備による作業性の向上

①作業機械を導入し、自力で簡易な基盤整備（用水路の拡幅や畔の除去）による区画拡大。

事業で導入したバックホーが活躍

令和2年度に導入したバックホーを用いて、耕作放棄地の整備や畦畔の除去など130aの整地を自力で実施。水田の均平化によって、麦とWCS（飼料稲）の作付けを行った。また3カ所の水路改修もできた。今後も基盤整備と農地集積は進めていく。

②老朽化したパイプラインの更新に取り組む。

更新には至っていないため、他地域のパイプラインも参考にしながら、どのように取り組むか考えていきたい。

※ビジョン以外の特記事項～共同の農業機械導入について

予想以上に役立った

本事業における機械の導入は軽作業化、効率化に役立ち、手のかかる作業も大幅に減った。特にバックホーについては、畦の除去や放棄地の整備に大変助かっている。用水路の泥上げにも活用。

- ・令和2年度⇒バックホーの導入、農業倉庫の整備
- ・令和3年度⇒消毒用ドローン、グレンタンク、穀物コンテナの導入



畦畔の除去や耕作放棄地の整備等に活躍中のバックホー



改修した水路



事業で改修した農業倉庫

振り返り・成果・今後に向けて

(1) 振り返り（ビジョン策定と取り組みの総括）

【取り組みが継続するためのポイント①
～ビジョン策定時】

**地域に合った明確な目標と理想に
実現可能な具体策で近づける**

【取り組みが継続するためのポイント②
～取り組みの総括】

**法人経営とハード面の整備で
営農意欲や安心感につなげる**

(2) 成果

【成果目標】

- ・法人の経営面積を40haまで拡大する。
- ・にんにく等の野菜を2ha栽培し、加工品開発にも取り組む。
- ・畦除去等で1haの簡易な基盤整備に取り組む。

【結果】

- ・法人の経営面積⇒30ha * 拡大を進める
- ・令和4年度からにんにく栽培を本格的に開始する。
- ・基盤整備⇒1ha * 導入機械で自力施工が進む。

【メンバーの声】

伊萩を次の世代に引き継げるという安心と希望

高齢の農業従事者がこれまで培ってきた農業の知識や技術を、今ならまだ教えることができる。事業を活用したことで、守ってきた農地と営農力を次の世代につなげられるという安心感と希望を得た。

(3) 今後に向けて

法人経営の安定化と新規品目の栽培開始

引き続き軽作業化・効率化を図ることで、収益を上げる農業、生きがいとしての農業を目指す。最終的には雇用や新規就農者へつなげたい。令和4年度から栽培を開始するにんにくは、加工販売まで法人で手がけるのが目標。また消毒用ドローンは、オペレータと共に本格的に運用を開始する。